



紹介フォント全部入り版

このPDFは「小説本文に良さそうなフォントを集めました。」という記事で紹介しているフォントを実際に印刷したらどんな感じなのか、を見くらべるために作成しました。

コンビニのコピー機にこのPDFを持ち込み、**B5 サイズ横**で印刷してください。小冊子機能は使わず、通常印刷、または両面印刷を行ってください。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

源暎こぶり明朝

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

「ぬおー—————っっ!!」
 「くるっ♥あっ、ああ……♥♥むっ、やべでええ♥♥♥い……っぐ♥」

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やるゆゑよ らりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ ラ ン
 あいうえお つやゆよわ アイウエオ ツヤユヨワ ヴカケ
 、、.・?!、ゞ、ゞ々※：；～— ——— ……

() [] ” “◇ 《》 「」 『』 ○△□◇☆♪†‡*# \$ &
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ ,?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとっくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいなのか。フロアリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファアベッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たったひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買って、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

源暎ちくご明朝

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

「ぬおー—————っっ!!」

「くるっ♥おっ、ああ……♥♥むっ、やべでええ♥♥♥い……ッぐ♥」

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やるゆるよ らりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ ラン
 あいうえお つやゆよわ アイウエオ ツヤユヨワ ヴカケ
 、、.・?!、ゞ、ゞ々※：；～— —……

() [] ” “◇ 《》 「」 『』 ○△□◇☆♪†‡*# \$ &
 A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
 a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ .,?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとつくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいだ。フロリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファアベッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があつたところには使い慣れた枕があつた。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があつた。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあつたはずのテールブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たつたひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかいない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあつた。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買ひ、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乘植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

しっぽり明朝 Regular

32Q 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

「ぬお-----っっっ!!」

「くるっ♥おっ、ああ……♥♥もっ、やべてええ♥♥♥い……ッぐ♥」

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やるゆるよ らりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ ヲン
 あいうえお つやゆよわ アイウエオ ツヤユヨワ ヴカケ
 、。、。？！、ゝ、ゞ々※：；～— —……

() {} [] " < > 《 》 「 」 『 』 ○ △ □ ◇ ☆ ♪ † ‡ * # \$ &
 A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
 a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ ..?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとっくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいなのか。フロリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファアベッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たつたひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかいない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力ずくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買って、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりて気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親函数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分間米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

ネオ濁点明朝

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

「ぬおー—————っっ！！」

「くるっ♥あっ、ああ……♥♥もっ、やべでええ♥♥♥い……ツぐ♥」

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やるゆゑよ りりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤキゴエヨ ラリルレロ ワ ラ ン
 あいうえお つやゆぼわ アイウエオ ツヤユヨワ ヴカゲ
 、。、。？！、ゞゞゞ々※：；～— ——— ……

() [] ” “ < > 《 》 「 」 『 』 ○ △ □ ◇ ☆ ♪ † ‡ * # \$ % &
 A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
 a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
 A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z .,?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとっくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいなのか。フロリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファークラッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――…

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たつたひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買って、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとつくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいなのか。フローリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファークラッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たつたひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかいない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買って、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

ZEN オールド明朝

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
はひふへほ まみむめも やるゆるよ らりるれろ わ を ん
がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ ラ ン
あいうえお つやゆよわ アイウエオ ツヤユヨワ ヴカケ
、。、。？！、ゝゝゞ々※：； — ……
() {} []” “<> 《》 「」 『』 ○△□◇☆♪ † ‡ * # \$ &
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z ,.?!
abcdefghijklmnopqrstuvwxyz 文字見本：16Q ≒ 11.4pt

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとっくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいなのか。フローリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファークラッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か……

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たったひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買って、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

夜永オールド明朝 Regular

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やるゆるよ らりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ ラ ン
 あいうえお つやゆよわ アイウエオ ツヤユヨワ ヴカケ
 、。、。？！、ゝゝゞ々※：；～— —……

() {} []” “<> 《》 「」 『』 ○△□◇☆♪ † ‡ * # \$ &
 A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
 a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ ,.?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとっくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいなのか。フローリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファークラッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たったひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買ひ、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

游明朝 Regular

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やるゆゑよ らりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ ラン
 あいうえお つやゆよわ アイウエオ ツヤユヨワ ヴカケ
 、。、。？！、ゝゝゞ々※：；～— ——— ……

() [] "《》「」『』 ○△□◇☆♪†‡*# \$ &
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ ,?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとっくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいかな。フロアリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファアベッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たつたひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それから、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買って、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

ヒラギノ明朝 W3

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やるゆゑよ らりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ ラン
 あいうえお つやゆよわ アイウエオ ツヤユヨワ ヴカケ
 、。、。？！、ゝ、ゞ々※：；～— ——— ……

() [] [] ”“ ‹› 《》 「」 『』 ○△□◇☆♪†‡*# \$ &
 A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
 a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ ,.?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとつくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいかな。フローリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファークラッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があつたところには使い慣れた枕があつた。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があつた。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあつたはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たつたひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝はけして酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあつた。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買ひ、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北每	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

MS 明朝

32Q ≙ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≙ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≙ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やるゆゑよ りりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ ラン
 あいうえお つやゆよわ アイウエオ ツヤユヨワ ヲカケ
 。。.? ! \ ` ˘ ˙ ˚ ※ : ; ~ — —……

() [] ” “ () 《 》 「 」 『 』 ○ △ □ ◇ ☆ ♪ † ‡ * # \$ % &
 ABCDEFGHI JKLMNOPQRSTUVWXYZ
 a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ .,?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとつくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいなのか。フローリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファ―ベッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たったひとりしかない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買ひ、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとつくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいだ。フローリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファークラッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があつたところには使い慣れた枕があつた。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があつた。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあつたはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たつたひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあつた。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買ひ、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊子	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

イワタ中明朝体オールド Pr6N

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やるゆゑよ りりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ ラン
 あいうえお つやゆよわ アイウエオ ツヤユヨワ ヴカケ
 、。、。？！、ゝゝゞ々※：；～— ——— ……

() [] " " 《 》 「 」 『 』 ○ △ □ ◇ ☆ ♪ † ‡ ※ # \$ %
 A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
 a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ ,.?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとっくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいなのか。フローリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファークラッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たったひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまい、『彼女』に力づくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それから、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買ひ、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
水表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

筑紫 A オールド明朝 Pr6

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
はひふへほ まみむめも やるゆゑよ らりるれろ わ を ん
がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ フ ン
あいうえお つやゆよわ アイウエオ ッヤユヨ ヲ ヱカケ
、。、。？！、ゝ、ゞ々※：；～— —……

○ □ ▢ ” “ ◇ 《 》 『 』 ○ △ □ ◇ ☆ ♪ † ‡ * # \$ &
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z ,.?!
abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとっくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいなのか。フロアリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファアヘッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たったひとりしかない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買ひ、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	婦弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

清和堂明朝 文芸 Std R

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やるゆゑよ りりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぱ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ ラン
 あいうえお つやゆよわ アイウエオ ツヤユヨワ ヴカケ
 、。、。？！、ゝゝゞ々※：；～— —……

() □ [] ”“ ◇ 《》 「」 『』 ○△□◇☆♪†‡*#&\$%
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ ,?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとつくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいなのか。フロリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファアベッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があつたところには使い慣れた枕があつた。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があつた。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあつたはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たつたひとりしかない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあつた。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それから、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買ひ、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

BIZ UD 明朝

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やるゆゑよ りりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ぎじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ ラン
 あいうえお つやゆよわ アイウエオ ツヤユヨワ ヴカケ
 、、、、？！、ゞゞゞ々々※：；～ー —— ……

() [] []” “<> 《》 「」 『』 ○△□◇☆♪†‡*# \$ &
 ABCDEFGHI JKLMNOPQRSTUVWXYZ
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ .,?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとっくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいなのか。フローリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファやベッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――…

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たつたひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買って、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

Klee One Regular

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
はひふへほ まみむめも やみゆよ らりるれろ わ を ん
がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ ラ ン
あいうえお つやゆよわ アイウエオ ッヤユヨワ ヲカケ
、。、。？！、ゞゞゞ々※：；～— ——— ……

() {} [] “〈〉《》」『』 ○△□◇☆♪†‡*#\$&
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z .,?!
abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとっくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいだ。フローリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファアベッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たったひとりしかない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまい、『彼女』に力ずくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買ひ、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

さつき源代明朝

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

「☒☒—————っっ!!」

「くるっ♥おっ、ああ……♥♥☒っ、やべでええ♥♥♥い……っぐ♥」

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やるゆるよ らりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぱ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ フ ン
 あいうえお つやゆよわ アイウエオ ツヤユヨワ ザカケ
 、。、。?!、ヽ、ゞ々※：；～— ——— ……

() [] "“{}《》「」『』 ○△□◇☆♪♯*#\$&
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ ,?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとつくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいなのか。フロリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファアベッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があつたところには使い慣れた枕があつた。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があつた。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあつたはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たつたひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかいない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまった。『彼女』に力づくで迫ったことがあつた。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買ひ、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右兩圓王	音下火花貝	學氣九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海繪	外角樂活間
丸岩顔汽記	歸弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公廣交光考	行高黃合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親圖數西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麥半番	父風分聞米
歩母方北每	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜來里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳驛央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係輕血決研	縣庫湖向幸	港號根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実寫者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消箇章勝	乘植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	對待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄轉	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役藥
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両綠	禮列練路和

Oradano 明朝 GSRR

32Q ⇒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ⇒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ⇒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やゆゆえよ らりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでぞ ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤユユエヨ ラリルレロ ワ ラ ン
 あいうえお つやゆよわ アイウエオ ッヤユヨ ヲ ヲカケ
 。。。。?!、バ\ ッ々※:; ~- — ……

() [] ” “◇ 《》 「」 『』 ○△□◇☆♪†‡*#&
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ ,.?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覺ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はどつくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいだ。フローリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファアベッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感觸が離れる感覚と、身体を包むものの感觸に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があつたところには使い慣れた枕があつた。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があつた。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあつたはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たつたひとりしかいない。しかし、その人物の姿は傍になかつた。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覺めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だつた。彼ではなく、台所にいる「彼女」や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だつた「彼女」たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は「仲間」という單語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほかに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だつたのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の歸りに、「彼女」に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会つた時には未成年だつた「彼女」も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝はけして酒に強い方ではないが、物凄く弱い譯でもなかつた。しかし飲み会の間、「彼女」に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない氣持ちでいたのだ。家なら、酔つたら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だつた。初めて「彼女」の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一氣に っつしまし、「彼女」に力づくで迫つたことがあつた。初めてなのに強い酒をいさなり飲んだことも、それを一氣に っつしまつたことも、それらはけして帝自身のせいだけではないのだが……その時に「彼女」を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一氣に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買ひ、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで氣まづい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

一右雨円王	音下火花貝	学気九休玉	金空月犬見
五口校左三	山子四糸字	耳七車手十	出女小上森
人水正生青	夕石赤千川	先早草足村	大男竹中虫
町天田土二	日入年白八	百文木本名	目立力林六
引羽雲園遠	何科夏家歌	画回会海絵	外角楽活間
丸岩顔汽記	帰弓牛魚京	強教近兄形	計元言原戸
古午後語工	公広交光考	行高黄合谷	国黒今才細
作算止市矢	姉思紙寺自	時室社弱首	秋週春書少
場色食心新	親凶数西声	星晴切雪船	線前組走多
太体台地池	知茶昼長鳥	朝直通弟店	点電刀冬当
東答頭同道	読内南肉馬	売買麦半番	父風分聞米
歩母方北毎	妹万明鳴毛	門夜野友用	曜来里理話
悪安暗医委	意育員院飲	運泳駅央横	屋温化荷開
界階寒感漢	館岸起期客	究急級宮球	去橋業曲局
銀区苦具君	係軽血決研	県庫湖向幸	港号根祭皿
仕死使始指	齒詩次事持	式実写者主	守取酒受州
拾終習集住	重宿所暑助	昭消商章勝	乗植申身神
真深進世整	昔全相送想	息速族他打	对待代第題
炭短談着注	柱丁帳調追	定庭笛鉄転	都度投豆島
湯登等動童	農波配倍箱	畑発反坂板	皮悲美鼻筆
氷表秒病品	負部服福物	平返勉放味	命面問役薬
由油有遊予	羊洋葉陽様	落流旅両緑	礼列練路和

游ゴシック Regular

32Q ≒ 22.8pt

自分の推しフォントを探そう

24Q ≒ 17pt

自分の推しフォントを探そう

12Q ≒ 8.5pt

自分の推しフォントを探そう

あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの
 はひふへほ まみむめも やみゆゑよ りりるれろ わ を ん
 がぎぐげご ざじずぜぞ だぢづでど ばびぶべぼ ぱぴぷぺぽ
 アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
 ハヒフヘホ マミムメモ ヤキユエヨ ラリルレロ ワ ラ ン
 あいうえお つやゆよわ アイウエオ ツヤユヨワ ヲカケ
 、。、。？！、ゝ、ゞ々※：；～— ——— ……

() {} [] " "《》「」『』 ○△□◇☆♪†‡*# \$ &
 A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
 a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ ,.?!
 abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとっくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいだ。フローリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファークラッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――：

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所がない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こんなことをするのは、してくれるのは、たったひとりしかない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、

今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝はけて酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたのだ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまい、『彼女』に力づくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身のせいだけではないのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それからは、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買って、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとり気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。